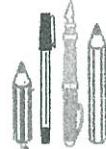


# 身じまい 自習室



⑨

「利用者からたくさん学ばせてもらいました」と  
松島さんは振り返る

(東京・九段)が設立された(後にNPOとなつた)。遺体搬送から死亡届の提出、火葬許可証の受領、火葬場の立ち会い



## 最後の準備のすべて

認知症になった時のための準備も必要になると気づいた。最近は入院や入所の保証だけでなく、転職の際の保証人になることも求められているらしい。ペットの引き受け先がらみの相談もあるそうだ。その「りす」の代表を長く務めてきた松島長先生から、実際に言われた言葉らしい。

末期がんで入院中の病院から電話がかかってきた。先生は自分の死後にすべきことを思いつぐまま書き出し

平成という時代になつて間もなく、東京・巣鴨の寺に「もやいの碑」という合葬式共同墓ができる。地縁・血縁に頼らない、会員制の、今でいう「墓友」でつくる新しい墓のかたちだった。しばらくして、その会員が声を上げる。

「で、親しい親族もないひとり暮らしの金納付、郵便物の返還、ワタシの遺骨を、どうたが、もやいの碑に入れてくれるの?」

そうか、家族に代わって単身者を支える仕組みが必要なのだ。そうして1993年、「りすシステム」前契約」という仕組み

い。それから納骨、税金納付、郵便物の返還、年金停止、家具処分、電気ガス代精算……。

会員が「やつてほしい」と考へることについて、公正証書を作成して決めていく。私が知る限り、この「生前契約」という仕組み

を国内で本格的に実施したのは「りす」が初めてである。

例えば、亡くなった後、誰に、いつ知らせられるか。△Aさんには絶対、知らせないで。焼くうちに、生きている間に生じることへの相談も受けれるようになる。施設や病院への入

如戒さん(81)が本を出した。タイトルは「私はひとりで死ねますか――支える契約家族」。

四半世紀にわたり会員たちの要望を表現してきた事例集であり、これから人生の最終段階をひとりで過ごすための準備対策本にもなっている。松島さんは「ま

で、依頼してきた。それを何とかクリアできることで、スタッフは自信をつけていった。「ひとりで死ねるわけない」。松島さんは言う。「でもそれは、ひとりで人生の最後をひどく生き抜くか、考えるということなんですね」

## 生前契約の25年

立会い、買い物や外出の付き添い。さらに、

所・入院保証、手術の立会い、買い物や外

出の付き添い。さらに、

す

【滝野隆浩・58歳】

さまで、次回は31日掲載